

のよ』

兄「ハッハ、ハ、ハ、マンマーだから 御飯だ ね

一源ちゃん』

父、母、姉「ハッハ、ハ、ハ、ホッホ、ハ、ハ、オホ、ハ、

ハ、ハ、ハ、

源ちゃん、不思議そーに

『ではんでも、いゝんでせう ねー兄さん』…

(完)

母の誕生日

矢橋 小葩

けふは幸雄さんのお母さまの誕生日なので

姉さまのきぬ子さんと相談の上、お母さまへの贈

物として、花束をさし上げることに決めました。

で、ふたりは近くの野にまわりました。頃は四

月のはじめで、麗かなお太陽さまは、蝶々の舞や
小鳥の歌などを、さもおもしろさうに、ニコニコ
笑つていらつしやいます。

切角、来たことは来たが、大方他の子に前つま
れて、たまに莖や蓮花草が残つてゐても、花束に
するやうなのは、すこしもありません。で、二人
はどんなに落膽しましたでせう。

でも、もつと行けば無いこともあるまい。と道
を他にとつてまわりますと、やさしいく水の韻
が聞えますので、その聲する方に出ましたら、い
さゝ川がチヨロ〜と流れてゐるのでした。

『姉さま、ほら、あんなにー、』

と、見ますと、川向ふには蓮化や莖やたんぼ、
が、それはく美しくう、まるで毛氈を敷きつめ
たやう、一面に咲きそつて、可愛い小さな蝶が

澤山 うれしうに舞を舞ふてをります。

幸雄さんは、ホク／＼もので、さあ、行かうと思つて、橋をさがしましたが、どうしたのか土橋一つすら見えません。

『飛ぼうか？』

『だつてあぶないわ』

『僕、だつてきついでだぜ』

『だけどお止しよ』

『ね？』

『あぶないッてばー』



姉さんの止めるのにもかまはず 何五尺にもたらぬこれッぽつちな川！

『「イニウ三イ……」』

とぼいと飛ぶと、ポチャン！

ふと幸雄さんは我に歸つて眼を開くと、枕元には、お母さま 姉さま等か、心配からよみがへつたやうに、うつくしい微笑を以て幸雄さんを迎へました。

『花は？』

とあたりを見廻しながら、かう幸雄さんが申しました時、お母さまはつと側に寄るや、薔薇のやうな唇にわたゝかき接吻して、そして、皆と、幸雄さんの『幸福』を神さまに、感謝し 祈りました。

た。

(白鳳社編輯局にて四月十四日稿)

十三